

合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容 (2)

— 3名の団員に着目して —

虫明眞砂子 ・ 早川 倫子

本稿では、合唱団員に対して実施したアンケート調査の分析によって明らかとなった、合唱演奏会の前後における団員の意識の変容についての全体的な傾向を踏まえて(虫明, 2020)、個々の団員の意識変化について、演奏会前の意識の異なる3名を抽出して、SCATを用いて分析を行った。その結果、演奏会前に、異なる方向へ向けられていた3名の団員の意識は、演奏会中の超越的な体験によって、演奏会終了後には、団員や指揮者との信頼関係へ向けられていることが挙げられた。また、個々の団員の練習参加頻度は、演奏会前の「指導者との関わりや指導内容」や演奏会後の「個々の思い」の変容に影響することも明らかになった。これらから、合唱の日々の美的追究やコンサート本番における音楽による生きたコミュニケーションによって成立する感動体験は、音楽的評価を超えて、人と人とを繋ぎ合わせる力を持っているということが考えられた。

Keywords : 合唱, 本番, 個々の団員, 意識, 変容

I. はじめに

合唱活動において、様々な演奏会に出演したり、自主企画で演奏会を実施したりすると、普段の合唱活動だけでは得られないような経験をし、演奏会前後で団員の意識に大きな変容が生じることがある。今回の調査対象である民間の合唱団イウス・フェミーネ女声合唱団(以後、I女声合唱団と称する)は、女性の人権問題解決について、チャリティコンサートの開催によって支援することが、大きな活動の目的の一つとなっており、団員にとってコンサートの位置付けは大きいと考える。

そこで、本研究では、演奏会の実施によって演奏会前後の団員の意識がどのように変わるのか、その特徴と要因を探るために、I女声合唱団の演奏会終了後に、合唱団員に対するアンケート調査を実施した。アンケート調査は、本番前、本番中、本番後に対する自由記述式を用いた。それぞれの回答内容について分析した結果、1. 練習方法・内容, 2. 団員・仲間, 3. 指導者・指導内容, 4. 合唱技術・特質, 5. 個々の思い, 6. その他の6項目に分類することができた(虫明, 2020)¹⁾。虫明(2020)

によると、合唱団全体の傾向として、本番前、本番中、本番後の中で、特に本番中の演奏時に、大きな心理的変容が認められた。それは、指揮者と団員、団員同士の相互の信頼関係を基盤としたもので、本番中の指揮者の合唱指揮によって、一体感、開放感、高揚感が高められ、団員各々が音楽的な力を発揮できたことにより、ピーク・パフォーマンスを成立させたためと考えられた²⁾。

本稿では、意識の変容の団員全体の傾向を分析した虫明(2020)の結果を踏まえて、個人内の変容に焦点を当て、SCATを用いてアンケート調査結果を分析する。団員一人ひとりの合唱活動に対する意識が、演奏会本番前から本番、終了後にどのように質的に変容したのか、今回は特に、演奏会前の練習過程における意識において、異なる傾向を示す3名の具体例を示しながら、個人内における合唱活動及び合唱演奏会の意義について考察する。

II. I女声合唱団に対するアンケート調査について

1. 調査対象者

アンケート調査は、虫明(2020)に示したように、

2018年の第7回チャリティコンサートへ参加した合唱団員25名を対象に行った。調査対象者の年齢は、40代5名、50代7名、60代10名、70代3名の計25名となっている。また、この合唱団の特徴として、様々な職種によるメンバーから構成されていることが挙げられる(虫明, 2015)⁽³⁾。その職種と人数は、教員(小・中・大等)9名、自営業(弁護士, 法律事務職員, デザイン事務所, 英語スクール代表)4名、会社員2名、パートタイマー3名、専業主婦4名、その他3名(薬剤師, 理学療法士, 自営フリーランス)である。在団期間は、2年～3年が2名、4年～5年が3名、5年以上が11名、10年以上が9名、さらに、チャリティコンサートの参加回数については、全7回のうち、1回参加が1名、2回参加が4名、3回参加が4名、4回参加が3名、5回参加が5名、6回参加が1名、7回全て参加が7名となっており、ほとんどのメンバーが活動を継続していることがわかる⁽⁴⁾。

2. 調査期間と調査内容

調査期間は、演奏会終了後の2018年11月15日～2018年11月30日となっている。調査内容は、主に、合唱活動の動機(選択式)、練習過程の感想(自由記述式)、本番中の感想(自由記述式)、終了後の感想(自由記述式)、これまでのコンサートとの相違(自由記述式)、継続希望(5件法式)、課題(2項目、自由記述式)、演奏曲目の感想(自由記述式)とした(虫明, 2020)。

3. 倫理的配慮

虫明(2020)に示したように、本調査では、まず、演奏会の主催であるI女声合唱団の団長に対して、調査内容について文書と口頭で説明を行い、理解と協力を求めた。団長の承諾を得た後に、虫明から団員全員へ文書と口頭で調査内容の説明を行い、団員の同意を得た。団員に対しては調査用紙の配布と回収を行った。調査の対象となった団員には、調査結果の論文への使用の了解を得ている。なお、本研究は、岡山大学大学院教育学研究科倫理委員会で調査の実施が承認されている。

Ⅲ. 分析と結果

1. 分析方法

本稿では、SCATによる分析方法を用いる。SCAT(Steps for Coding Theorization)とは、質的データの分析の難しさの問題を克服するために開発された手法である⁽⁵⁾。SCATでは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、それぞれデータに、

下記の①～④の順にコードを考え付していく4段階のコーディングと、④のテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析方法である⁽⁶⁾。

- ①データの中の注目すべき語句
- ②それを言いかえるためのテキスト外の語句
- ③それを説明するようなテキスト外の概念
- ④そこから浮かび上がるテーマ・構成概念

この手法は、1つだけの事例のデータ等、比較的小さな質的データの分析にも有効である⁽⁷⁾ことから、本研究において調査した個人々のアンケート結果の分析に適していると考えた。

本稿では、主に演奏会前、演奏会中、演奏会後の個人々内の意識の変容に焦点を当てるため、演奏会前についての設問3「演奏会の練習過程で感じてこられたこと」、演奏会中についての設問4「演奏会の本番中に感じられたこと」、演奏会後についての設問5「演奏会を終了して感じられたこと」及び設問6「これまでの演奏会と違ったところ」の自由記述を分析の対象とした。分析にあたっては、虫明・早川の2名で行い進めた。

なお、個人々のデータ分析の前に、初めに設問3の回答内容25名分をSCATの手法で分析し、浮かび上がったそれぞれの団員の分析結果④テーマ・構成概念について、特徴と共通項を導き出しグルーピングした。本稿では、それぞれのグループに該当する団員を1人ずつ抽出して、個別の分析結果を示しながら報告する。これは、演奏会前の合唱活動についての個人々の異なる意識が、演奏会によってどのように変容したのかを明らかにするためである。

2. 分析結果

(1) 練習過程(演奏会前)における意識の傾向

ここでは、前述のとおり、練習過程(演奏会前)における意識の傾向を把握するために、25名全員分の設問3の回答内容をSCATで分析した。

分析によって浮上した④のテーマ・構成概念について見ていくと、練習過程(演奏会前)におけるそれぞれの団員の意識を、主に4つのカテゴリーに分類することができた。まず1つ目が、練習参加への意識、練習参加についての団員内の温度差、練習参加への物理的環境(背景)、団員としての自覚等、「合唱活動を持続させるための環境と練習参加の重要性」についての意識のカテゴリー、2つ目は、指導者による指導内容、指導者の役割、指導による意識の向上等、「合唱団における指導者の存在意義」に

合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容（2）

についての意識のカテゴリー、3つ目は、練習の内容と方法、合唱曲のレベル、合唱における基本的な知識と技術力、合唱の意義と音楽観等、「合唱活動の内容面（練習内容や習得状況）」についての意識のカテゴリー、4つ目は、その他（複合的意識、個人特有の意識等）、となった。

次に、1～3のカテゴリーに分類された団員の中

から、各カテゴリー1名ずつ抽出し（カテゴリー1～3に該当するそれぞれの団員を団員A、団員B、団員Cとする）、それぞれの意識の変容の具体について報告する。以下の表1・表2・表3は、設問3～6（演奏会前・演奏会中・演奏会后）についての3名の自由記述の、SCATによる分析（4段階のコーディング）の結果（抜粋）を示している。

表1 団員Aの合唱活動に対する意識の変容についてのSCATの分析ワークシート

発話者(設問)	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
設問3	今回のコンサートの練習過程で、感じてこられたことは何か				
団員A	イウスは、高橋先生に個別に発声指導をしていただけたとても贅沢なありがたい合唱団です。	個別に発声指導をしていただけたとても贅沢なありがたい合唱団	合唱団の特別感・優位さ(発声指導)	合唱団固有の特徴と意義	合唱団への特別な帰属意識 合唱技術の基本
団員A	でも、コンサートの1か月前になっても全員が揃うことなく、両先生から厳しいお言葉をいただきました。団長がその日の練習内容をメールで報告してくださいましたが、やはり練習参加に勝るものではありません。	1ヶ月前になっても全員が揃うことなくメールで報告練習参加に勝るものはありません	練習参加への意欲の無さについての不満 練習の意味	合唱団固有の背景(多業種による練習参加の困難性)	合唱への参加を制約する物理的環境 団員の温度差
団員A	メゾは、1か月前からカラオケで2回ほど7時～10時過ぎまで個別にパート練習をしました。特別することで、パートのつながりや曲への不安も解消しましたが、ぎりぎりになっての特別よりも余裕があったらと思いました。	パート練習 パートのつながりや曲への不安も解消	練習の補足 不安の解消	合唱の向上に向けての練習	練習状況の改善
設問4	コンサートの本番中に感じられたことは何ですか				
団員A	先生の指揮(表情と指先)で、魔法にかかったようにとても気持ちよく、心をこめて歌うことができました。指揮の素晴らしいさを実感させていただきました。	先生の指揮 魔法 心を込めて歌う 指揮の素晴らしいさ	指揮と表現の関係性 本番の超越体験	指導者(指揮者)の役割 演奏者(歌い手)の役割 本番の超越体験	本番中における指揮者と歌い手の超越的な体験
設問5	コンサートが終了して感じられたことは何ですか				
団員A	充実感がありました。今回の曲は、ほぼ暗譜してしまっていたので、終了後も曲目をよく口ずさんでいました。	充実感 ほぼ暗譜 よく口ずさむ	コンサート後の心理的状態 楽曲との親近感	コンサートの意義 演奏楽曲と自分との関係	演奏会の成就 音楽の身体的浸透
団員A	団長をはじめコンサート終了までの各役員・個々の団結も素晴らしいと思いました。	各役員・個々の団結	コンサートまでの団員のあり方についての肯定的評価	役員と団員の役割とあり方	今までの個々の課題を超越した状況
設問6	これまでのコンサートと違ったところは何でしたか				
団員A	私は6回から参加で今回で2回目です。前回は主人が入退院を繰り返し、療養中ということもあり、練習をお休みすることもありました。今回は前回よりも沢山練習に参加しました。	主人が入退院・療養中 練習をお休みする 前回より沢山練習に参加	練習参加可能な背景	個人の背景(家族のこと)	合唱参加を制約する物理的環境(家族)
団員A	先生の個別の発声指導の積み重ねもあり、前回よりも安心してステージに立つことができました。練習を休まずに基本だと思っているのを続けたいと思います。	個別の発声練習 積み重ね 安心してステージに立つ 練習を休まずに	練習内容と継続 本番へ向けた練習の意義	合唱における個別の発声練習とその継続の大切さ 練習が本番に活かされるという実感	練習継続による技能の高まりと達成感

表2 団員Bの合唱活動に対する意識の変容についてのSCATの分析ワークシート

発話者(設問)	テキスト	〈1〉テキスト中の注目すべき語句	〈2〉テキスト中の語句の言い換え	〈3〉左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
設問3	今回のコンサートの練習過程で、感じてこられたことは何か				
団員B	毎回の発声練習(特に個人に合わせたもの)は、大変効果があり、みんなの響きが良くなっていくのを実感できました。それに伴い、全体のハーモニーが美しい!と感じる時間が増えていったと思います。回を重ねるたびに、確実に上手になっていると感じています。	発声練習(特に個人に合わせたもの)は大変効果があり全体のハーモニーが美しい!と感じる時間が増え確実に上達	個別発声練習の効果 上達の喜び 個人の上達が全体の合唱の上達へ与える影響	練習の効果と達成感 個々人の技能によって成り立つ合唱としてのハーモニーの大切さ	個々の技能面の向上の必要性 個々の技術面の向上による合唱ハーモニーの美的向上

団員B	先生に「こういうふうイメージして」 と助言をいただくだけで、すぐに良くなるので、びっくりすることもあります。ただ、歌い始めから気を付けて歌えとなお良いのですが。	先生に助言をいただくだけで、すぐに良くなる 歌い始めから気をつけて歌えとなお良い	先生の指導助言の効果	指導者の指導助言の必要性	合唱活動における指導者の助言の的確さと効果 合唱そのものを良くしたいという向上心
設問4	コンサートの本番中に感じられたことは何ですか				
団員B	立ち位置が近かったので、他のパートの音がよく聴こえて、歌いやすかったです。また、みんなの気迫も感じることができました。	立ち位置音がよく聴こえて歌いやすかった 気迫も感じる	合唱本番の隊形音環境と歌いやすさ 歌い手同士の歌へ向かう姿勢	本番の音環境空間と立ち位置による音響と演奏者同士の関係性	コンサート会場の物理的環境 団員の精神的な相互作用 本番の良好な歌唱状況
設問5	コンサートが終了して感じられたことは何ですか				
団員B	終わった瞬間、充実感と達成感を感じました。自分の中で歌い切ったという満足感がありました。このメンバーで歌えてよかったと心の底から思いました。	充実感と達成感歌いきったという満足感 このメンバーで歌えてよかった	本番終了後の心理的状況 本番の達成度	コンサート後の心理的状態	個人内の肯定的評価 合唱団員としての自覚と喜びの再確認 コンサートがもたらすwellbeing (幸福感)
設問6	これまでのコンサートと違ったところは何でしたか				
団員B	自分の中で暗譜できた曲も多かったの、その分達成感があったのかもと感じています。	暗譜できた曲も多かった 達成感があった	暗譜と達成感の関係	楽曲との距離と達成感	楽曲の身体的浸透によって生じる達成感
団員B	しかし、何より高橋先生の指揮に魅了され、まるで催眠術にかかったように波長が合い、今までで一番（合唱人生の中で）歌いやすかったです。頭は冷静でしたが、体が大変心地良く、のびのび歌っていました。	指揮に魅了され催眠術にかかったように歌いやすかった	指揮者の存在と指揮の役割 指揮による歌（表現）への没頭	指揮者による表現の変容	指揮による心身の開放表現の変容を促す指揮の影響力

表3 団員Cの合唱活動に対する意識の変容についてのSCATの分析ワークシート

発話者(設問)	テキスト	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え	(3) 左を説明するようなテキスト外 の概念	(4) テーマ・構 概念(前後や全体の文脈を考慮して)
設問3	今回のコンサートの練習過程で、感じてこられたことは何か				
団員C	一定のレベルに達したと思った曲も、別の練習日には上手い出来ないことが多く、練習の仕方、特にパート練習や団員練習の充実が必要だと感じていました。団員が揃って練習できる機会が少ないためか、あるいは集中度が足りないためか、計画通りに練習を進めていくと、結果として中途半端な仕上がりにってしまう曲が多くなったように感じました。	練習の仕方 パート練習や団員練習の充実が必要だと感じていました	練習内容や方法の充実の必要性 練習内容や方法と習得の状況	練習環境や練習内容のあり方	合唱の練習法の難しさと課題
団員C	指導して下さった先生も、毎回練習のスタート時点で、前回と同じレベルから私たちを指導することになったことと思います。録音したものを家で聞くと、そのことがとてもはっきりとわかりました。今までのコンサートでは感じたことがない不安がありました。	前回と同じレベルから私たちを指導する 今までのコンサートでは感じたことがない不安	指導内容が身につけていない状況 コンサートへの不安	習得状況とコンサートへの意識の関係	習得度の不安定さの認識
設問4	コンサートの本番中に感じられたことは何ですか				
団員C	午前中のリハーサルでも上手いかなかったの、少し不安でした。	リハーサルでもうまいかなかった 少し不安	リハーサルの出来具合がもたらす精神状態	本番前の精神状態の要因	本番前の精神状態の要因
団員C	でも、本番で「鷗」は、練習では一度も感じたことがないほど、みんなの気持ちが高揚しました。これも先生の指揮のなせる業だと感じました。本番は先生の指揮に導かれるままに、みんなの気持ちが集中し、歌っているという一体感を感じました。先生からは今までにない本気度が伝わってきて、指揮のままに歌った!というのが正直な感想です。そして充実感と合唱する喜びが感じられました。	練習では一度も感じたことがない 気持ちが高揚 先生の指揮のなせる業 一体感 指揮のままに歌っていた 充実感と合唱する喜び	本番による超越的体験 指揮者と演奏者の一体感 一体感による合唱の充実	練習と本番との違い 音楽へのフロー状態 頼れるものは指揮者という認識	指揮者への信頼 会場(空間)、観客、高揚感の相乗効果 複合的変容

合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容（2）

団員C	練習時には目立っていた声も、本番では全体に溶け込んでいて、そういう意味でもとても歌いやすく感じました。	目立っていた声も、本番では全体に溶け込んで	一体感による合唱の充実	無意識に調整される声	本番の演奏力の急激な向上
設問5	コンサートが終了して感じられたことは何ですか				
団員C	「合唱は楽しい！素晴らしい！」そして「高橋先生、有難う！松下先生、有難う！一緒に歌ったみんな、有難う！聞きに来てくださったみなさん、有難う！」と心から感謝しました。	合唱は楽しい！素晴らしい！有難う！心から感謝	心から湧き出る感謝の気持ち	演奏直後の高揚感と一体感	演奏会成就における高揚感と一体感合唱活動、指導者、仲間に対する肯定的評価
団員C	感謝と喜び。会場が小さいと聞いてくださる方々との間が近くなり、一体感のようなものが感じられるのかな、とか、舞台から降りて客席の直ぐそばで「上を向いて歩こう」を一緒に歌ったから、聞いてくださった方々おひとりお一人の顔が見え一層そのように感じたのかなどと思いました。	聞いてくださる方々との間が近く一体感	演奏者と聴取者の一体感	演奏会という環境要因がもたらすもの	日頃の合唱練習では経験できない演奏者と観客との関係性
設問6	これまでのコンサートと違ったところは何でしたか				
団員C	今まではコンサートが近くなると直前まで練習日以外にも練習し、それなりに自分たちでも揃ってきたと感じるところまでになりました。今回は決められた練習日以外練習しませんでした。そのためか、コンサート当日も不安がありました。不安が的中し、午前のリハーサルは不調でした。	今回は決められた練習日以外練習しませんでした。コンサート当日も不安不安が的中リハーサルは不調	練習状況と本番前の精神状態との関係性	練習から本番までのあり方	練習から本番までのプロセス本番前の不調による心理的不安
団員C	後から先生が本番までの2時間、何ができるかあらゆることを考えましたという趣旨のことを言われましたが、先生の指揮からは「強い意志」と迫ってくる中でもどうか「迫力」が伝わってきました。過去の指揮では感じたことがありません。	何ができるか先生の指揮からは「強い意志」「迫力」過去の指揮では感じたことがありません	指揮の力指導者の精神性の伝授	指揮者、指導者が伝えること	指揮者の技術的、精神的リード

(2) 合唱活動に対する意識の変容についてのストーリー・ライン

次に、上記の表1、表2、表3に示したそれぞれの団員の分析結果【④テーマ・構成概念】に基づいて、合唱活動に対する意識の変容についてのストーリー・ラインを以下のように構成した。

① 団員Aの場合

団員Aは、【合唱団への特別な帰属意識】を抱いている。それは、【合唱技術の基本】である個別の発声練習が、経験を積んだ指導者によって行われている団体だからである。多業種のメンバーによる合唱団であるため、団員それぞれの【合唱への参加を制約する物理的環境】によって、練習へ参加ができない団員に対して不満を抱き【団員の温度差】を感じていた。そのような状況の中でも団員Aは、パート練習の機会を別に設ける等【練習状況の改善】を図り頑張ろうとする意識が読み取れる。

こうした、演奏会前に感じていたこれまでの練習状況への不満は【本番中における指揮者と歌手の超越的な体験】によって、打ち消されている。

【演奏会の成就】によって充実感を味わい、さらには歌い続けてきたことによる【音楽の身体的浸透】が生じている状態である。また、役員や団員の団結についての肯定的評価もあり、【今までの個々の課題を超越した状況】になっている。また、個々人内

でも【合唱参加を制約する物理的環境】の改善により、合唱の練習や演奏会に参加できたことで、【練習継続による技能の高まりと達成感】の関係性を再認識することに繋がっている。

② 団員Bの場合

団員Bは、練習過程（演奏会前）において、【個々の技術面の向上の必要性】を感じ、【個々の技術面の向上による合唱ハーモニーの美的向上】について実感を伴いながら練習を進めるなど、主として合唱活動における内容面やその上達に肯定的な意識を向けている。特に、【合唱活動における指導者の助言の的確さと効果】についての期待が大きく、【合唱そのものを良くしたいという向上心】を持って取り組んでいる。

コンサートの演奏時には、立ち位置や音の聴こえ等【コンサート会場での物理的環境】をはじめ、その環境が生み出す【団員の精神的な相互作用】等、【本番の良好な歌唱状況】へ意識が向けられている。

演奏会終了後には、充実感、達成感、満足感といった【個人内の肯定的評価】と、このメンバーで歌えてよかったという【合唱団員としての自覚と喜びの再確認】を行っており、【コンサートがもたらすwellbeing】を味わっている。また、以前よりも暗譜が多くできていた状況を振り返り、【楽曲に対する把握と達成感】の関係にも気づいている。さらに

は、今回のコンサートにおいては、【指揮による心身の開放】を、身をもって経験し、【表現の変容を促す指揮の影響】を再認識している。

③団員Cの場合

団員Cは、練習過程（本番前）において、熟達していかない合唱に不安を抱き、【合唱の練習法の難しさと課題】について常に意識を向けていた。指導者による指導内容も身につかない状況という【習得度の不安定さの認識】が、コンサートへの不安をさらにかき立てている。また、リハーサルでの不調も、本番が不安だという【本番前の精神状態の要因】となっており、合唱の熟達度（出来具合）に意識が向いている。

そのような中でも、演奏会中には、【指揮者への信頼】を基盤とし、【会場（空間）、観客、高揚感によって生成される本番力】が、意識の【複合的変容】をもたらす。演奏会を成功裏に終えることができたことを実感している。また、高揚感、一体感、充実感といった心理的変容だけでなく、無意識のうちに団員らの声が溶け込む等、【本番の演奏力の急激な向上】も認められている。

【演奏会成就における高揚感と一体感】の経験が、あらゆるものへの感謝の気持ちを生じさせ、【合唱活動、指導者、仲間に対する肯定的評価】をもたらしている。また、高揚感や一体感といったものは【日頃の合唱練習では経験できない演奏者と観客との関係性】によっても構築されており、その素晴らしさを演奏会という機会によって経験できたことを認識している。

【練習から本番までのプロセス】において、練習時間が不足していたという意識がリハーサルの不調を生じさせたこと、またそうした【本番前の不調による心理的不安】が本番直前まで持続していたことを客観的に振り返ることができている。さらには、本番中の【指揮者の技術的、精神的リード】が、団員の意識と演奏力を瞬時に変容させたと認識している。

(3) 合唱活動に対する意識の変容についての理論記述

ここでは、上記のストーリー・ラインに基づいて導き出した合唱活動に対する意識の変容についての理論記述を示す。

①団員Aの場合

・【合唱技術の基本】である個別の発声練習を、経験を積んだ指導者によって行われている団体だと

いう状況は、【合唱団への特別な帰属意識】を生む。

- ・【合唱への参加を制約する物理的環境】によって、練習への参加者が少ない状況は、団員の不満を招き、【団員の温度差】を感じやすくする。
- ・練習が一番大切だと考えている団員は、【団員の温度差】（不満）を感じる中でも、自主的に【練習方法の改善】を図ろうとする。
- ・【本番中における指揮者と歌手の超越的な体験】は、演奏会前に感じていたこれまでの練習状況への不満等を打ち消す。
- ・歌い続けてきたことによる【音楽の身体的浸透】が、【演奏会成就】の充実感の要因となる。
- ・【演奏会の成就】が他者への評価を肯定的にする。
- ・練習に参加できたこと、その練習継続によって技能の高まりを感じ取ることができたことは、【演奏会成就】の充実感の要因となる。

②団員Bの場合

- ・合唱団員は、【個々の技術面の向上による合唱ハーモニーの美的向上】について、自身の【個々の技術面の向上の必要性】だけでなく、合唱団員全体の課題として意識する。
- ・【合唱そのものを良くしたいという向上心】は、【合唱活動における指導者の助言の的確さと効果】を求める。
- ・【合唱そのものを良くしたいという向上心】は、立ち位置や音の聴こえ等【コンサート会場での物理的環境】をはじめ、【団員の精神的な相互作用】等、【本番の良好な歌唱状況】を構成する要因へ意識を向かわせる。
- ・演奏会終了後の【個人内の肯定的評価】は、他者に対する肯定的評価を生む。
- ・演奏会終了後の【個人内の肯定的評価】は、個人内の達成プロセスの具体的評価を可能とする。
- ・【指揮による心身の開放】等、身体を介した音楽的経験は、その後の合唱活動に大きな影響力を持つ。

③団員Cの場合

- ・合唱が熟達しない状況にある場合、【合唱の練習法の難しさと課題】へ意識が向く。
- ・指導者による指導内容も身につかない状況という【習得度の不安定さの認識】が、コンサートへの不安を生じさせる。
- ・リハーサルでの不調は、本番が不安だという【本番前の精神状態の要因】となる。
- ・演奏会中には、【指揮者への信頼】を基盤とし、【会場（空間）、観客、高揚感によって生成される本

番力】が生じることがある。

- ・【指揮者への信頼】を基盤とし、【会場（空間）、観客、高揚感によって生成される本番力】は、意識の【複合的変容】をもたらす。
- ・演奏中の高揚感、一体感、充実感といった心理的充足が、【本番の演奏力の急激な向上】をもたらす。
- ・【演奏会成就における高揚感と一体感】の経験が、あらゆるものへの感謝の気持ちや、【合唱活動、指導者、仲間に対する肯定的評価】をもたらす。
- ・高揚感や一体感といった心理的充足は、【日頃の合唱練習では経験できない演奏者と観客との関係性】によっても構築される。
- ・【練習から本番までのプロセス】における練習時間の不足という意識が、リハーサルの不調を生じさせる。
- ・【本番前の不調による心理的不安】は、本番直前まで持続する可能性がある。
- ・本番中の【指揮者の技術的、精神的リード】が、団員の意識と演奏力を瞬時に変容させる力を持つ。

IV. 総合考察

(1) 3名の分析結果に見られる特徴

本稿では、合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容について、団員3名に焦点を当ててSCATを用いて分析を行ってきた。

3名については、演奏会前→演奏会中→演奏会後に、以下のような意識の変容の特徴が見られる。

①団員Aの場合

- ・演奏会前：合唱団についての特別な帰属意識が強く、団員が練習に揃わないという「合唱活動を継続させるための環境と練習参加の重要性」を認識していない団員の態度に否定的な意識を持っている。
- ・演奏会中：指揮者と団員による今までにない超越的な体験によって否定的な意識は一気に打ち消されている。
- ・演奏会後：音楽的達成度はもとより、団員への信頼や感謝の意識が向けられている。

②団員Bの場合

- ・演奏会前：個々の技術面の向上と合唱全体としての美的向上が相互に成り立っている点に関心があり、指導者の的確な助言の必要性を感じる等「合唱団における指導者の存在意義」について意識が向けられている。
- ・演奏会中：コンサート会場の物理的環境等へ意識が向いており、客観的に本番の歌唱状況を認識で

きている。

- ・演奏会後：演奏前にも感じていた指導者（指揮者）の重要性についての意識は、演奏会中に指揮の影響力を目の当たりにしたことによって、演奏会後もさらに高められている。

③団員Cの場合

- ・演奏会前：「合唱活動の内容面（練習内容や習熟状況）」に意識を向けており、その出来具合によって精神的にも不安な状態が生じている。
- ・演奏会中：指揮者への信頼を基盤に、会場（空間）、観客、それに伴う高揚感によって、今までに経験したことのない本番力を発揮したことを認識している。
- ・演奏会後：あらゆるものへの感謝の気持ち等、肯定的評価へ意識が変容している。特に、団員、観客、指揮者との一体感が、演奏力へもつながったと認識している。

このように、3名のそれぞれの特徴をまとめていくと、共通点として、演奏会前にそれぞれ異なる方向へ向けられていた意識は、演奏会中の超越的な体験によって、演奏会終了後には、個人内の充実感、達成感、満足感に加えて、団員や指揮者との一体感等関係性へ向けられていることが挙げられる。竹重（2009）は、合唱の本質について次のように捉えている。「仲間や指導者との感動的な交流、心のふれあい、どうしたって離れたたくなる。中略。心の奥深いところで叫び続ける声。合唱人が共通して併せ持つ目に見えない普遍性から導かれる何かがあるのではないか。」さらに、竹重（2009）は、「合唱は個人を非常に大切にする営み、相手と周囲を尊重する活動である」とも述べている⁸⁾。

このように、合唱音楽による感動体験は、音楽的評価を超えて、さらに人と人とが強力に繋がり合う意識を高めるものと考えられる。

(2) 練習頻度と意識の変容との関係性

虫明（2020）の分析結果と今回の団員Aの結果にも見られるように、練習参加への頻度はI女声合唱団にとって大きな課題となっている。今回、分析結果を報告した3名の団員については、日頃から合唱練習への出席率が高く、社会的活動へ貢献する合唱団としての意義を認めつつも、合唱そのものを楽しんだり、合唱の美的追究に重きを置いて活動したりしているメンバーであったことから、前述のような意識の変容の特徴が認められたが、練習頻度の多少が意識の変容の様相に関連しているのだろうか。こ

ここでは、以下のように団員を2群（練習頻度多と練習頻度少）に分けて、本番前中後及び変化において語句・文節に分類した件数をそれぞれ累計した（表4）。そして、変容の傾向をグラフに表し、グラフの形状に注目することにより検討した（図1, 図2）。

図1に示したように、練習頻度が多めの団員らの意識の変容からは、本番前から本番中は特に「指導者・指導内容」において意識が高く、本番後の変化についても、練習頻度が少ないメンバーに比べて、「指導者・指導内容」への意識が高いことがわかる。また、本番後の「個々の思い」の変化の動きは大きく、練習を継続的に進めてきたからこそその心理的変容が現れていると読み取ることができる。蟹江(2004)は、合唱指揮者で作曲家である松下耕の合唱指導実践法を例に挙げ、「指導者は、一人ひとりに何が必要なのかを常に考え、リハーサル・ビルディングを行い、相手の状態によってその指導方法を臨機応変に変容させる」と述べている（p.9）⁹⁾。このような練習の積み重ねの中で繰り返される指揮者と団員の音楽的コミュニケーションによって、音楽

的向上と信頼関係が高まり、最終的な演奏発表の場が存在するといえるだろう。

一方で、図2に示したように、練習頻度が少ないメンバーにおいては、合唱団としての社会的な活動に意義を見出して参加している場合が多いが、美的追究に関わる「指導者との関わりや指導内容」の重要性を本番後もあまり意識していない傾向にあることが読み取れる。また、「個々の思い」の変容についても大きな上昇傾向は見られず、感動体験の度合いが低い傾向にあるのではないかと推察された。

さらに、本番中においては、どちらの群も「指導者・指導内容」への意識が高いことが読み取れるが、本番中における指導者（指揮者）の役割の重要性を示唆している。

(3) まとめ

今日、合唱団としての社会的活動等、音楽外的な意義を動因として、合唱を行う人は多いが、今回分析した事例のように、演奏会前には合唱活動に対して異なる方向性を有していた意識が、演奏会を契機

表4 団員の練習頻度比較による本番前中後及び変化における語句・文節の分類件数

個々の団員の練習頻度	本番前		本番中		本番後		変化		累計
	多	少	多	少	多	少	多	少	
練習方法・内容	32	21	3	0	1	8	14	5	84
団員・仲間	28	11	18	8	12	3	17	4	101
指導者・指導内容	34	5	50	20	8	2	19	1	139
合唱技術・特質	36	13	13	7	12	2	17	7	107
個々の思い	41	26	47	22	55	21	30	6	248
その他	5	2	9	5	6	3	6	3	39
累計	176	78	140	62	94	39	103	26	718

注：虫明（2020, p.49）を参考に作成している。

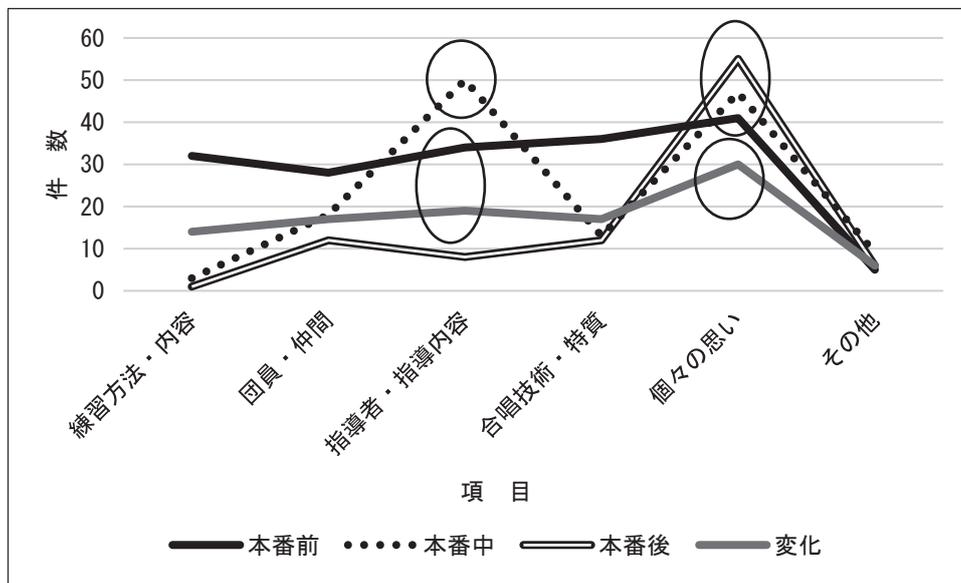


図1 練習頻度が高めの団員における意識の変容

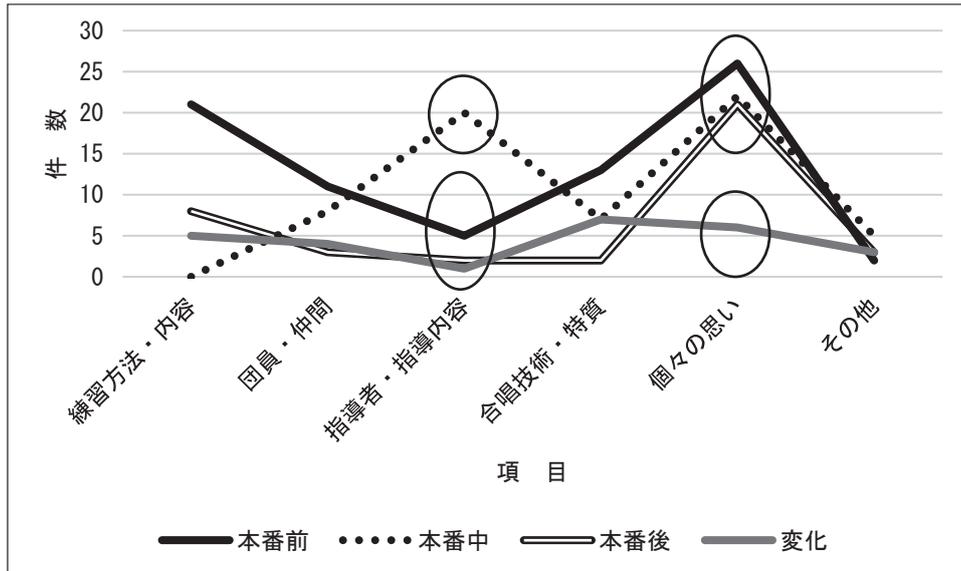


図2 練習頻度が低めの団員における意識の変容

注：図1，図2は虫明（2020,p.49）を参考に作成している。

として変容することを示した。このような変容が生じた背景には、合唱としての日々の美的追求があり、それ無くしては、本番における感動体験は生じ得なかったと考える。そして、その美的感動体験こそが、団員や指導者をはじめとした人間関係を確固とし、その後の継続的な合唱活動へのエネルギーとなって繋がっていくものと考えられる。

今後は、演奏会の達成感を生む要因について、音楽内の要因と音楽外的要因のそれぞれの視点からさらに調査・検討するとともに、その達成感の度合いや内的要素が、その後の合唱活動や、団員と指揮者の良好な人間関係の構築にどのように影響を及ぼすのかについても検討していきたい。

引用文献

- (1) 虫明眞砂子（2020）「合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容－コンサート終了後の意識調査に基づいて－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第175号，pp.47-56.
- (2) 上掲書(1)，p.54.
- (3) 虫明眞砂子（2015）「多様な職種を持つメンバーで構成された女声合唱団の合唱指導の試み」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第158号，pp.137-148.
- (4) 上掲書(1)，p.32.
- (5) 大谷尚（2019）『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会，pp.270-272.
- (6) 上掲書(5)，p.271.
- (7) 上掲書(5)，p.271.

- (8) 竹重敦（2009）「30年－時をかけた感動をふたたび」合唱表現研究会編（代表松下耕）『季刊合唱表現』第30号，東京電化株式会社，p.7.
- (9) 蟹江春香（2004）「合唱団員個々を育てる松下耕のプログラム」合唱表現研究会編（代表松下耕）『季刊合唱表現』第30号，東京電化株式会社，p.7.

参考文献

- Emmons, Shirlee, and Thomas, Alma (1998) *Power Performance for Singers; Transcending the Barriers*, originally published in English, Oxford University Press, Inc. (エモンズ, シャーリー・トマス, アルマ/曾ちはる訳 (2007)『声楽家のための本番力』音楽之友社.)
- Green, Don (2001) *Audition Success*, Copyright by Routledge. (グリーン, ドン/辻秀一監訳, 那波けい子翻訳 (2013)『ジュリアードで実践している演奏者の必勝メンタルトレーニング』ヤマハミュージックメディア.)
- 蟹江春香（2004）「合唱団員個々を育てる松下耕のプログラム」合唱表現研究会編（代表松下耕）『季刊合唱表現』第30号，東京電化株式会社，pp.6-8.
- 岸信介, 中島文子（2005）「私たちはなぜ合唱を続けるのか」合唱表現研究会編（代表松下耕）『季刊合唱表現』第13号，東京電化株式会社，pp.7-10.
- 近藤恵子（2004）「生徒の心に合唱の火をつけるために」合唱表現研究会編（代表松下耕）『季刊合唱表現』第9号，東京電化株式会社，pp.9-10.

虫明眞砂子 (2015) 「多様な職種を持つメンバーで構成された女声合唱団の合唱指導の試み」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第158号, pp. 137-148.

虫明眞砂子 (2020) 「合唱演奏会を契機とした合唱団員の意識の変容－コンサート終了後の意識調査に基づいて－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第175号, pp.47-56.

永原恵三 (2012) 『合唱の思考：柴田南雄論の試み』春秋社.

大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会.

竹重敦 (2009) 「30年－時をかけた感動をふたたび」合唱表現研究会編(代表松下耕)『季刊 合唱表現』第30号, 東京電化株式会社, pp.6-8.

辻秀一 (2013) 『演奏者勝利学』ヤマハミュージックメディア.

戸ノ下達也・横山琢哉編著 (2011) 『日本の合唱史』青弓社.